九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

謝冰心『春水』の自筆原稿：九州大学で1世紀ぶりに発見

中里見, 敬
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/2231637

出版情報：日中友好新聞. (2019年４月15日号), 2019-04-15. Japan-China friendship Association
バージョン：
権利関係：

謝冰心『春水』の自筆原稿
九州大学で1世紀ぶりに発見

中里見 敬

謝冰心

嬰児，
在他顫動的啼声中
有無限神秘的言語，
従最初的霊魂裏帯来
要告訴世界

嬰児は、
そのふるえる泣き声の
中に
無限の神秘的なこと
ばをもっている、
最初のたましいの中か
らもたらされ
世界に告げようとし
ているのだ
『春水』六四

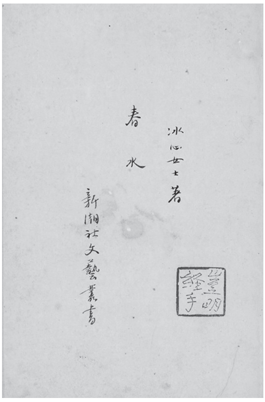
この詩は、今からほぼ一世紀前の1922年、燕京大学の女学生だった謝冰心（しゃひょうしん）（1900～1999）が書いたものです。清新でみずみずしい感性に驚かされます。北京の新聞「晨報」に掲載された後、翌1923年に詩集『春水』が出版されると、わずか1日で売り切れるほどのベストセラーになりました。

『春水』を世に出したのは、新潮社文芸叢書の主編を務めていた北京大学教授の周作人（1885～1967）です。魯迅の弟といったほうが分かりやすいかもしれません。

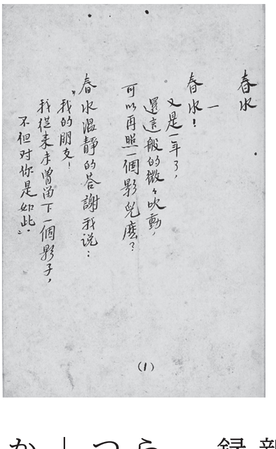
周作人は、謝冰心の才能を高く評価して、自ら編集する文芸叢書の第一冊として『春水』を刊行したのです。ちなみに第二冊は魯迅の『吶喊（とっかん）』でした。

その『春水』の謝冰心による自筆原稿が、一昨年、九州大学附属図書館濱文庫で発見されました。この原稿は謝冰心が詩集出版のため1922年11月に清書したもので、出版後は主編である周作人の手元に保管されていました。

ところが、1939年10月に周作人が古紙整理をした際、『春水』の原稿が出てきたので、かつて自宅に下宿していた日本人留学生に贈ることにしたのです。このことは周作人日記に「装丁して濱君に贈ることにする」と記されていました。



▶『春水』手稿・扉
謝冰心の自筆に加えて、「豈明経手」という周作人の印が押されています。



▶『春水』手稿・第1頁
謝冰心自筆の第一首です。

九州大学附属図書館濱文庫所蔵

日記に書かれていた濱君とは、1934年から2年間、北京に留学して中国演劇の研究を行なった濱一衛（はまかずえ）（1909～1984）元・九州大学教授のことです。留学中、周家に寄宿した濱一衛を、周作人は厚くもてなし、しかもすでに帰国した濱に『春水』手稿を贈ったのです。

濱はすぐに「今度（このたび）は冰心女士の春水の原稿本を下さって有難うございます。……私の書斎に貴重本が一冊出来た訳で迚（とて）も嬉しう御座います」とお礼をしたためました。周家に保管されていたこの手紙をご遺族が見つけてくださり、それにより『春水』手稿が海を渡った経緯のすべてが明らかになったのです。

このたび『春水』手稿と日中の文学交流――周作人、謝冰心、濱一衛』（花書院、2019年3月）が刊行されました。『春水』の詩の魅力、周作人と謝冰心の師弟関係、8回も来日した謝冰心と日本の関わりなど、最新の研究成果が13編収録された論文集です。

1冊の詩集の原稿から、日本と中国の深いつながりと人的交流――隠された歴史が明らかになったことに、本書の編者として深い感銘を覚えています。

（九州大学言語文化研究院・教授）